

<書評論文>

視覚的表象と物語としての歴史

Elena Tajima Creef,
*Imaging Japanese America: The Visual Construction
 of Citizenship, Nation, and the Body*
 (New York University Press, 2004)

周 東 夏 希

1 はじめに

第二次世界大戦中の1941年、日本軍による真珠湾攻撃が行われ、当時のアメリカ社会において日系アメリカ人⁽¹⁾に対する反感が高まり、翌年の大統領令9066号によって12万人とも言われる人々が強制収容された。長い間、この歴史を語ることは、移民社会であり自由を標榜するアメリカにおいては忌避されてきた。しかし近年、収容経験者などによって、この沈黙は破られてきている。このようなポストコロニアリズム的状况で問題となるのは、誰が、何を、どのように語るのかということである。

本書の著者、Elena Tajima Creefはアジア系アメリカ人のカルチュラル・スタディーズを専門領域として研究を行い、カリフォルニア大学を卒業後、1993年からウェルズリー大学に助教授として勤務している。自身の最初の単著である本書でCreefは、ポストコロニアリズムの知見を援用しながら、日系人の視覚的表象を分析することを通して、日系人がアメリカ社会のなかでいかに周縁化されてきたかを考察している。

具体的には、強制収容の経験がいかに社会的に認識され、国民的集合意識のなかで意味をもってきたのか。あるいは日系人がどのような存在として構築されてきたのか、日系人としてのアイデンティティの基盤、Japanese Americaというべきものはどのように（思い）描かれてきたのか。こうした問いに対して、彼女は戦時中から現在にいたるまでの写真・

⁽¹⁾ 以下、引用部を除いて「日系人」と表記する。

映画といった視覚的表象をとりあげ、歴史の記憶＝再構成のしかたについて考察している。

本稿では、視覚的表象から歴史認識の問題へ接近しようとする本書の試みが、どのように展開され、どのような意義をもつのかを考察していく。エスニック集団がいかに表象され、それが社会の歴史認識にどのように関連するかという問いは、単一民族国家幻想が破られた現代日本の研究においても同様に設定されるべき課題だと考えるためである。

2 内容紹介

プロローグでは、アメリカ社会をひとつの団結した共同体として認識するために視覚的表象が大きな役割を果たしてきたことが述べられる。とりわけ第二次世界大戦中はその視覚的構築が行われ、日系人はそのなかで、ある時は「他者」、ある時は「アメリカ市民」と表象されてきた。そしてその日系人観は、いまだに尾を引いているという。

本書の第1章⁽²⁾および第2章は戦時中の強制収容された日系人の表象を中心に扱い、第3章～第5章は近年の表象を考察している。本稿では戦時中と戦後に区分して紹介していこう。

2.1 戦時中の表象

第二次世界大戦中（とりわけ真珠湾攻撃以降）のアメリカでは、強い反日感情が高まっていた。こうした時勢にあって、写真家Ansel Adamsは強制収容所を訪れ、日系人を親しみやすく、アメリカ人なのであってアジア人ではないという対抗表象を提出した。被写体には女子児童が多く（男子児童は軍事を想起させるため）、服装や髪型によって戦略的に人種差を減じて見せている。あるいは成人男女であれば、アメリカの軍服や白衣によって「アメリカへの奉仕者」という印象を演出する。人々の多くは笑顔で、仰角から撮影されることで英雄的に表現される。こうした表現は大胆でリベラルではあるが、日本人性を消去しアメリカに同化してしまうことで、日系人の集合的アイデンティティを不可視にしてしまう、つまり「Japanese Americaから切り離して、孤立したアメリカ市民として国家の生地になかへ縫い合わせてしまう」（p.31）ものだった。

Dorothea Langeによる収容直前に撮影された写真のなかでは、星条旗へ敬礼しながら複

⁽²⁾ 各章の表題は以下のとおり。第1章「Ansel Adams、Dorothea Lange、宮武東洋の写真における日系アメリカ人の身体表象」、第2章「カメラの向こう、言葉の外」、第3章「映画における歴史的トラウマのジェンダー化と日系アメリカ人の身体規律訓練」、第4章「博物館、記憶、マンザナー」、第5章「『友とジャップの見分け方』のもうひとつの教訓」。

雑な表情を浮かべる女子児童や、タグ（財産差押えの際に所持品につける）のついた服を着た人々の写真を通して、悲劇的な存在として日系人が表象される。目線と同じ高さの撮影角度や、しわしわの軍服は、アイロニカルな効果を高めている。

自身が収容者であった宮武東洋の写真は、さらにアイロニカルである。収容所を囲む有刺鉄線の前で退屈な様子を示す少年や監視塔を無気味な怪物のように写した写真は、公的要請によって撮影したAdamsやLangeには不可能な表現であった。

Langeや宮武の写真には力強く訴えかけるものがあるが、写真は処分されたり撮影不可能であったりするために、「けっして撮影されないもの」が存在してしまう。こうした問題を幸いにも補うのは、Mine Okuboによる収容所内部のイラストである。これらは収容者の日常的な生活風景を扱い、なかには共同浴場の様子を伝えるものもある。プライバシーの無い収容生活が浮き彫りになり、写真によっては表現されなかった側面が明らかになる。

2.2 戦後の表象

つづいて議論は、戦後この収容の歴史がいかに表象されてきたのか、あるいは表象されなかったのかに移る。第3章では映画、第4章では博物館等での展示、第5章ではオリンピック選手をめぐる報道にそれぞれ焦点をあてている。ここでは3・4章について概観したのち、5章を中心に紹介していくことにしよう。

第3章でとりあげる『ヒマラヤ杉に降る雪』（1999）のような映画においては、白人男性と日系人女性の恋愛が物語の軸で、白人女性と日系人男性ではないなど古いコードが踏襲されており、また、主人公が戦時の抑圧と苦しみの真の主体として表現されている。そのため、きわめて定型的であり、白人にとっての罪の歴史的記憶を和らげるものである。

他方、第4章で挙げられる博物館およびマンザナー収容所跡地における展示は、強制収容について日系人たちが当事者の視点から歴史を語ろうとしている。しかし国民的集合意識のなかでどのような記憶＝再構成をすべきかについて、誰の記憶によって歴史を語るのかという議論が浮上し、日系人強制収容の歴史は決済し終えていないことが判明する。

その結果、戦時の日系人観は時を越えて現代においてもみられることがあるという。その例として第5章で挙げられているのが、1992年のアルベールビル五輪における、日系人フィギュア・スケート選手のクリスティ・ヤマグチおよび、彼女と比較した伊藤みどりの表象である。

ここでは、戦時中の日本人および日系人観を示した「友とジャップの見分け方」という図解の雑誌記事が議論の下敷きとなる。ここでは日本人の身体的特徴が否定的に紹介され

ている。

そして、この変形としてヤマグチと伊藤の表象を捉えることができる。記事のなかでヤマグチは繊細で芸術的な演技をする選手だと紹介される一方で、伊藤は運動能力ばかりで優雅な演技はできないというように対比される。また、2人を並べた演技中の写真では、ヤマグチが高い位置に置かれ、伊藤は低い姿勢で、身長差が極度に強調されるようになっている。このほか、ヤマグチの写真に「American Dream」と見出しをつけられた雑誌の表紙や、彼女の家族のアメリカ的生活のエピソードが示されている。つまり、こうした表象においてヤマグチは日本性を消去され過剰にアメリカ性を強調されており、他方で伊藤は戦時中の日本人の身体を代表している。

ヤマグチと強制収容の歴史の関係は語られこそするものの、「大昔に、集団として日系人が苦しんだ」という物語のなかに回収されており、結果としてそこから立ち直った「模範的マイノリティ」としての日系人表象が完成している。そして、これによって和解や同化が、人種的に多様な文化についてまわるはずの緊張にとってかわるのである。

このように、戦時中の日本人観をひそかに残存させながら予定調和的な多文化主義を立ち上げるのでないとするれば、いかに多文化、多民族、多言語のアメリカ表象を（思い）描くことができるのであろうか。エピローグでCreelfは、もはや国家を単一の物語（とりわけ白人の物語）のなかでとらえることが不可能であり、より複雑な構成をもつものとして、多文化社会をとらえる必要があると同時に、日系人の身体がその複雑性のもとで表象されることに期待するとして本書を閉じている。

3 考察

以上のように、本書は日系人の視覚的表象を通して、そこにアメリカにおける日系人の周縁化の歴史をいかに語り、構築⁽³⁾していくかという問題に対峙している。しかしながら、まさしくこの視覚的表象を分析する際の方法上の分裂が本書のアキレス腱となっているのではないだろうか。以下、この点から本書を考察していくことにする。

3.1 視覚的表象にいかに対峙するか

以上の論点に接近するために、まず本書において視覚的表象の分析と日系人をめぐる歴

⁽³⁾ Creelfは本書において構築主義という立場を表明しているわけではないが、議論の要所や題名でconstruct(ion)という言葉を用いており、彼女の関心の大きな部分は構築性にあると考えてよいだろう。

史の物語とが、どのように接続されうるとCreefが考えているのか示しておこう。

視覚的表象は2つの基礎的水準から読むことができる。すなわち、(1) 文学テキストに対すると同様の水準での批判的・理論的な精査・解釈・分析をしよう「物語」として、それから、(2) 人種・階級・ジェンダーの政治学のレンズを通して、市民と国民の形成の物語をどう「読む」かをわれわれに教える象徴的「テキスト」としてである (p.9: 強調引用者)

2つの基礎的水準を言いかえるなら、一方(水準1)は物語としての歴史を、視覚的表象から文学のように読み取るということである。これは本書後半部(3～5章)の議論に対応しており、映画などで日系人(史)がいかに語られているかという進行中の構築作業を明らかにする。この構築過程にある物語を定形化する象徴的作用を明らかにするのがもう一方(水準2)である。こちらは本書の前半部(1・2章)に対応しており、Adamsの写真に見られるような、日系人表象の視覚的レトリック(アングル、服装など)を説明する。

Creefはこの2つの水準から視覚的表象を分析し、そこに立ち上がる物語、また物語としての歴史を抽出しようと試みるのである。

3.2 接続の困難

それではCreefはこの両立をいかに試みているのか。本書の議論を概観すると、前半が収容者の視覚的レトリックの考察であり、後半はその歴史を物語ることへと発展しつつも、視覚的側面についての関心は後退している⁽⁴⁾ ことがわかる。言い換えれば、前半は戦中の視覚的レトリック分析、後半が戦後の物語の抽出と分かれている。これでは、両時代の表象の関係が曖昧なままである。

この分断こそが、上述した2つの関心を接続することの困難を示している。つまり、Creefの分析は戦中の視覚的表象のレトリックと戦後に語られる収容経験とをそれぞれ別個に明らかにしてはいても、視覚的表象のレトリックにおいて立ち上がる物語⁽⁵⁾ は明らかにしきれていない。

⁽⁴⁾ 3章では映画の映像でなくストーリーが、4章では展示の舞台装置でなく各方面の語りが分析の中心である。後半で視覚的レトリックについての本格的な言及があるのはヤマグチと伊藤の比較くらいであるが、それもインタビューや紹介記事の文章など、非視覚的表象による分析のための補助線という印象を免れない。

⁽⁵⁾ たとえばヤマグチをめぐる議論では、本書の主旨にしたがえばその視覚的側面に焦点をあてて彼女の身体が多義性が確認されるべきである。

この両者を並列ではなく接続するためにはどうすべきか。Creefは異なる時代（戦中と戦後）の表象について、それぞれを異なるアプローチ（レトリック分析と物語分析）によって分析しているところに問題がある。それを解消するなら、戦中と戦後の表象の諸特徴を比較し、その差異ないし斉一性を確認したうえで、日系人イメージとその物語がいかに生成・展開したか突きとめるのが、彼女の関心と分析対象に適した堅実な方途であろう。

Clarke (2005) は、各種の言説分析の手法について見取り図を紹介し、視覚的言説の分析の実例として人体解剖図の時代ごとの比較を行っている。彼女は、視覚的言説のあらゆる特徴を観察し、そこに存在するレトリックを解明することで、その視覚的言説の歴史的ないし文化的な位置づけを明らかにできるとする⁽⁶⁾。

Creefの分析においては、たとえば映像のなかで日系人が登場して収容経験が語られる際に、その画面構成や音楽の使用はどうなっているのか。それは戦中とはどう異なるか、あるいは共通しているか。こうした問いに答えるかたちで両時代のレトリックの対応関係を確認し、その共通点や相違点から、物語としての歴史を解明することが求められる。こうすることで、両時代の表象を一貫した視座から分析することが可能になるはずである。

また、Creefが解明しようとする日系人の物語としての歴史は、日系人と白人の身体、集合的国民的歴史記憶の装置、日系人の他者性など、いくつかの要素から成ると想定され、その構築性について考察がなされるが、はたしてCreefがとりあげた要素は必要十分であるのか。つまり、日系人の物語の生成と展開をX、Y、Zから実体的に把握できると仮定してしまうことで、そこにCreef自身による構築がなされていないだろうか。少なくとも、本書ではその交通整理がされておらず、視覚的表象における物語の構築はいかに分析可能かという疑問が残る⁽⁷⁾。

以上のように、本書には手放しで賛美されがちな多文化主義に切れ目を入れながら視覚的表象研究の射程の広さを示したという意義がある。しかし、視覚的表象と物語としての歴史の問題とが十分に接続されてはいないという課題もある。今後のこの分野の研究においては、分析手法のさらなる精緻化が必要となるだろう。

⁽⁶⁾ Clarke 2005:219。Clarkeはグラウンデッド・セオリーの立場から分析を展開しており、虚心坦懐にデータを眺めることへの信頼には賛否が分かれるが、妥当性の担保の手続きがなされていることは評価してよい。

⁽⁷⁾ たとえばShohat (1991=1998) はハリウッド映画におけるマイノリティ表象を扱ううえで、民族的アイデンティティを独立に仮定する判断を中止し、「関係」から立ち上がるものと措定して広範な関心の整理と議論の方向づけを行っており、こうした方法論的整備に自覚的であることをうかがわせる。また、平・中河は参与者のレリヴァンスに即し「内在的視点を徹底化」して研究を行うことは可能であり、研究者自身による構築は回避可能であると主張している（平・中河 2006:316）。

参考文献

- Clarke, Adele E., 2005, *Situational Analysis: Grounded Theory After the Postmodern Turn*, Thousand Oaks: Sage Publications.
- Shohat, Ella., 1991, "Ethnicities-in-Relation: Toward a Multicultural Reading of American Cinema". Lester D. Friedman ed., *Unspeakable Images: Ethnicity and the American Cinema*, Urbana: University of Illinois Press. (=1998, とちぎあきら訳「関係としての民族性－アメリカ映画のマルチカルチュラル的な読解に向けて」岩本憲児他編『「新」映画理論集成①歴史／人種／ジェンダー』フィルムアート社、200-233.)
- 平英美・中河伸俊、2006「構築主義アプローチの到達点－エンピリカルな見地からの課題と展望」平英美・中河伸俊編『新版 構築主義の社会学－実在論争を超えて』世界思想社、285-328.

(しゅうとう なつき・修士課程)